



おすすめの一冊

小市和雄 監修『横浜謎解き散歩』

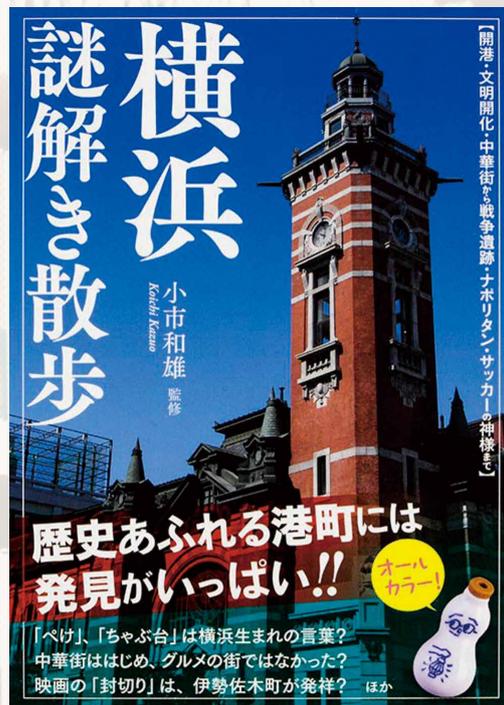
本 書は「横浜謎解き散歩」、いわゆる雑学本です。気楽にお読みください。

私は、還暦を過ぎた頃から、通勤時に職場最寄りの1駅手前で下車し、横浜・山下町界隈の遠回り通勤をしています。始めたきっかけは人間ドックを受診した時の保健指導で、それなりに続いています。

ただ、この遠回り通勤をしていると幾つかの疑問や謎が出てきました。中華街はなぜ港に向かって斜めの区画なのか。日本大通りはどうして30m以上も幅員が必要だったのか。さらに、町名が「山下町」なのに「加賀町警察署」だったり、バス停が「薩摩町中区役所前」だったりするのはなぜか——等々です。でも、しばらくすると疑問も薄れ、通勤の目印となっていました。

しかしある日、本屋で本書をべらべらめくっていると、本の題名の通り幾つかの疑問や謎が解けました。

まずは中華街の謎。横浜は安政5



『横浜謎解き散歩』
小市和雄 監修
KADOKAWA/新人物文庫

(1858)年に通商条約が締結され開港が決まると、幕府による外国人居留地の整備が始まりました。

その中で現在の中華街のエリアは、居留地で空いていた横浜新田という田んぼで、水路やあぜ道がそのまま残ったことにより横浜港の海岸線に対して街路が斜めになった説と、風水思想を重視する中国人たちが、東西南北の方向に街路が向いている場所を意図的に拠点とした説が推測されていました。

次に日本大通りの疑問は、慶応2(1866)年に日本人居住区の3分の1、外国人居留地の4分の1が焼失する大火災が発生し、外国人の防火意識が高まったことから、災害に備えた近代的な都市づくりを幕府に要望。火災が起きても拡大を防ぐ防火帯として、外国人居留地と日本人居住区を区切る広い道路ができました。完成は大火災から4年後の明治3(1870)年で、「日本大通り」と命名されたのは明治

8(1875)年だそうです。

また、加賀町や薩摩町の町名は、開港後の日本人居住区には警備のため各藩の藩兵が置かれ、その場所がそのまま町名となっていました。加賀藩は日本大通りに屋敷があり、越後町、駿河町、神戸町など30におよぶ藩兵にちなんだ町名が明治32(1899)年までありました。時代が変わっても町名が残っていると、その時代を垣間見た気になりました。

私の遠回り通勤は散歩感覚となり続いています。皆さんも時間を見つけて散歩(ウォーキング)するのはいかがでしょうか。見慣れた街並みを好奇心の赴くまま歩くと、きつと新たな発見があり、健康づくりにもなります。一人の時間も満喫してください。

本書は、内容も多彩で充実していると思いますが、地図を見ながら読むことをおすすめします。各地域の雑学本もありますから、歴史と健康を実感してください。

根本 克幸

ねもと かつゆき

横浜生まれ。神奈川県予防医学協会理事長。1977年に同協会へ入職し、学校保健、地域保健、職域保健などの活動に携わる。予防医学事業中央会理事。